

逆光源氏 ～私は悪くないもん！～

イベリ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ある雨の日に、女は真つ白な赤ん坊を拾った。女は生来の優しさから、その赤ん坊を拾い自身の手で育て上げた。四苦八苦しながら、子供の成長を自身の事のように喜んで、思い出を積み重ねた。

それが約18年前。

その赤ん坊は今

「おはよう、母さん。今日も綺麗だね。」

「ん”ん”っ」（おはよう、ベル。）

滅茶苦茶美青年になっていた。

甲斐甲斐しく世話をやき、戦闘時には必ず自分を守ってくれて、肌が恋しい時は閨を共にしてくれる。そして、明らかに自身に向けられた好意。

ハッキリ言おう。めっちゃくちや自分のタイプに育ってしまったのだ。

女の主神は語る

「ウチ知ってるで、逆光源氏言うんや。半分事案やでこれ。」

「うるさいっ！私のせいじゃないもんっ！」

普段の冷静さなんてかなぐり捨てて、女は顔を真つ赤にしながら叫んだ。

「誰だ！あの子をこんな子にしたのは！ああ！わかってるよ！私だよ！こんちくしょうめ！…でも、好き…！」

これは、意図せずして逆光源氏をしてしまった、恋愛経験・耐性Z  
EROなハイエルフの、成長日記である。

## 目次

マザーズ・クロニクル

王族妖精奮闘母子手帳〜0歳〜① | 1

王族妖精奮闘母子手帳〜0歳〜② | 5

王族妖精奮闘母子手帳〜0歳〜③ | 9

逆光源氏物語

プロローグ 〜どうしてこうなった〜 | 14

息子の癖に生意気だ〜リヴェリア様は喰われない〜 | 20

〇〇しないと出れない部屋〜プロローグ〜 | 28

〇〇しないと出れない部屋 愛してるよゲーム | 33

## マザーズ・クロニクル

### 王族妖精奮闘母子手帳〜0歳〜①

今日は土砂降り。雨雲が空に広がり、太陽は欠片も見えやしない。そんな中を、エルフの王族——リヴェリアは私用帰りにホームへと向かって爆走していた。

その両手には、真っ白な赤ん坊を大切そうに抱き抱えて。

「———すぐにお湯と清潔なタオルを準備しろ！」

「りっ、リヴェリア様!?びしよびしよじゃないですか!？」

「私のことなぞあとまわしだ!早くしろと言っているんだ!!」

「はっ、はい!!？」

びしよ濡れの副団長に驚いたエルフの団員は、最初にリヴェリアの心配をしたが、すぐにリヴェリアが普段は使わない乱暴な口調で焦った様に告げられ、急ぎ風呂場に向かう。

「頼む…頑張れ!すぐに暖かくなるからな…!」

抱えられた真っ白な赤ん坊は、唇を真っ青にしてガタガタと震え、泣き声すらもかぼそい物になっていた。偶然気づいたのは、当時のリヴェリアが既に第1級の冒険者であったからこそか、はたまた、子供の鳴き声に反応する、女の本能故だったのかは分からないが、何にしろでも幸運だった。

服を着たまま、自身のローブを脱ぎさり、桶にお湯と水を足し熱すぎない人肌の温度にして、赤ん坊をお湯につける。

「頑張れ…!暖かいか?熱くないか?」

手先と足先を摩擦で温めながら、唇の色が戻っていくのを確認して、ホッとため息をついた。

そのままお湯からあげ、風邪をひかない様に良く全身を拭いて、清潔なタオルで包んで、自身の体温で温める。

「…なんとか、凌げたか…」

震えが消え、唇の色もピンク色の健康的な色に戻り、静かな寝息を

たてる赤ん坊を見て、リヴェリアは自然に微笑み、慈しみを持って首も座っていない赤子を抱き締める。

団員によれば、この姿があまりにも様になっていたことから、過去に存在した、神を生んだ人とされる『聖母』の様だとエルフのコミュニティ中に語られることになった。

「なるほどなあ…で、リヴェリアは偶然その赤ちゃんを見つけて、衰弱しとったから保護したんやな。しっかし、ホンマに真っ白やな、初めて見たで『アルビノ』ちゃんは…ほーれ、ロキたんやぞ〜！」

「やめろロキ、酒臭さが移ったらどうしてくれる。」

「ちよおー！ウチ一応主神やぞ〜！」

キャツキヤと笑う赤ん坊を取り合うように、女性陣ははしやいでいるが、男性幹部である団長と切込隊長は、ちよつぱり複雑な気持ちでいた。

「…まさか、リヴェリアが赤ん坊を拾ってくるとはね…」

「最初の堅物エルフはどこへやら…」

「あ”あ”？」

「…何でもありませんわい…」

最早、子を持った母親の様になったリヴェリアには、この赤ん坊に変な事を聞かれるのは耐えられず、いつになく荒れる。幹部であるフィン、ガレスはやはり難しい顔をする。

「それで、その子はどうするんだい？」

「どうする…とは、どういう意味だ？」

「そりや、親の搜索もそうだし、孤児院に預けるとか…色々あるだろう？」

「――」

「…まさか、リヴェリア。君…育てる気だったのかい？」

無言で頷くりヴェリアに驚きながらも、ガレスは重々しく口を開いた。

「…リヴェリア。子供を育てるということは簡単じゃ無いことくらい分かつとるじゃろ？」

「…そんな事わかつている！…しかし…この子はゴミ置き場に捨てられていたんだぞ…！…親探しをしたとして…いや、まず搜索願いですら出されていない可能性が高い。」

しかし、リヴェリアは引かない。普段の彼女からはかけ離れて、異様なまでにこの赤ん坊を育てる意思を見せている。そして、フィンはある答えにたどり着く。

「…それは、その子が『忌み子』だからかい？」

「…っ！」

リヴェリアが今までに無いほどに眦を吊り上げ、フィンを睨みつける。

『忌み子』

それは遙か昔、神がまだ地上に進出する以前の話。エルフの国に伝わった、負の慣習。

白髪、白磁の肌を持ち、深紅の瞳に染まった赤子を気味悪がったエルフは、その様な赤ん坊が生まれる度に、赤ん坊を生贄として生き埋めにしたたり、酷い仕打ちをして殺していた。

しかし、1000年ほど前に神が降りてきたことにより、その赤ん坊は別になんでもない。ただ、体の色素が薄いだけの赤ん坊だと言う事実を伝えられ、その悪習は廃れて行った。しかし、人の間ではその噂が膨れに膨れ、殺さなければ災いが起こると言うデマが、未だに残っている地域や、そうだと信じている人達はある。勿論、禍なんて起こらない。ただ、気味が悪いと無意味に殺されてきた。それを広めたエルフの長として、リヴェリアはこの赤ん坊に酷く同情していた。

しかし、フィンはリヴェリアに容赦なく言葉を投げかける。

「…リヴェリア、その子は君達エルフの贖罪の道具じゃない。」

「っ、わかつている！…そんな事はわかつている!!」

リヴェリアの悲痛な叫びに反応したのか、赤ん坊が大声で泣き出す。

ロキが抱えている赤ん坊をリヴェリアは優しく、されど奪う様に見える。すると、安心したのか赤ん坊は泣きやみ、すぐに穏やかな寝息を立てた。

「……頼む…待ってくれ……私は…ただ…」

そのまま、リヴェリアは部屋を出て自身の部屋に戻り、赤ん坊と一緒に、部屋に籠った。

腕の中に抱く小さな温もりに、リヴェリアはあやしなから微笑みかける。

「お前は…どうしたい？」

キヤツキヤツと笑う赤ん坊は、リヴェリアに手を伸ばす。それを見て、リヴェリアは顔を寄せて自分の顔を触らせると、また赤ん坊は子供らしく笑った。

「ふふ…わかるはずもないか…さあ、寝よう。明日は私と街を回ってみよう…誰かお前を知ってる人物がいるかも知れん。」

どこか悲壮感を秘めたリヴェリアの顔を見て、赤ん坊は心配そうに髪の毛を引っ張る。

「いてて…こーらっ…ふふふ、意外といたずらっ子か？…いいや、励ましてくれるんだな…ありがとう。」

リヴェリアは、名も知らぬ赤ん坊を優しく抱きしめる。

腕の中で眠る赤子に、慈しみをもちながら、抱きしめた。

これは、母であろうとする女の奮闘を書き記した母子日記。

ありふれた、家族の軌跡だ。



## 王族妖精奮闘母子手帳く0歳く②

ザワザワと喧騒が包む街の街道が、今日は一段と騒がしい。まるで何かを避けるように真ん中が割れる。

そこを歩く美女は、辟易した。自分を遠目から見て、何故か拜んでいるやつや、泡を吹いて倒れる同族がいるのだから、嫌にもなるだろう。しかし、今は腕の中でもそもそと動く赤子に、意識を向ける。

「さて…どうだ？見たことある景色はあるか？」

んおう、あく。と唸る赤ん坊に問いかけるが、笑い声だけが帰ってくる。

「ふふっ…悪かった、お前に聞いても仕方が無いか。」

そう微笑んで、ぷりつとしたモチモチの頬をつつついた。

その光景によつて、周りのエルフ数百名が重症を負ったが、赤ん坊は気にもせずに笑い、本人ももうシラを切ることにした。

「…とりあえず、ギルドに行くか。」

それから、リヴェリアはオラリオ中を歩き回った。孤児院に託児所。行方不明の依頼を出されている依頼主を訪れたものの、結局は有力な情報を得ることは出来ず、困り顔でホームへと戻ってきていた。

「結局、お前の母親は見つからなかったな…」

赤ん坊を高く掲げれば、こちらの気も知らず、キヤツキヤと笑って楽しそうにしている。そんな姿を見れば、こうして苦労したことも、そう悪くなかったかなと考えることができた。

しかし、ここまで特徴的な赤ん坊なのに、搜索の願いも出されていないとなると、本格的に捨てられたと考えることが自然になる。そうなれば、この子とは別れとなるだろう。

それが、無性に悲しい。

はじめに、この赤ん坊の声を聞いたからだろうか。

「…お前は、どうしたい？なんて、言ってもわからないか。」

一つ微笑みを零し、赤ん坊のミルクを人肌に温めながら、赤ん坊を抱き上げた。

「リヴェリア、ちよつとええか？」

そうしていると、控えめなノックと聞き慣れた訛りの聞いた声が部屋に届いた。

「ロキか…入っていいぞ。」

「失礼するわー…んお、ご飯時やったか。」

「ああ、両親捜索のついでにベビー用品も買ってきた…一時的にでも、必要だろう。」

「せやな！ほれ、はよご飯くれ〜って催促してるで？」

「おっと、ほら…しっかり飲むんだぞ…」

しっかりと息継ぎの時間も忘れないように、ゆつくりと粉ミルクを与える。あつという間になくなった哺乳瓶を脇において、背中をトントン叩けば、けぷっとおくびを零した。

「すんごいおくびテクやな。リヴェリア、ほんまは一児の母だったりせえへん？」

「ふふ、伊達に長く生きちゃいなさ。」

少しの談笑のあとに、若干の沈黙。それを破ったのは、ロキだった。「リヴェリア、それでどうだったんや？その子の身元は？」

「全く成果なし…孤児院もいくつか当たってみたが、どこも外れだ。ここまで特徴があれば、すぐに見つかると思っていたんだが…」

「…時期が時期や。『向こう側』の赤ん坊ちゆうことも考えられる。「子に罪はないだろう!!」

「わかつとる。そりやそうや、その子がそうだったとして、罪を問うのはお門違いや。そんなの誰もがわかつとる。だから落ち着き、リヴェリア。」

「……っ！」

ぐっと拳を握って、数秒息を止めて自身の感情の猛りを抑える。いささか冷静さにかけている。ソレは、昨日のフィンの言動が理由なのだろうか。

それだけではないが、あの言葉は深く刺さっているのだ。

「…すまない。」

「責任感じるんはええけど、種族そのものの業まで背負うのは、ちいと傲慢にすぎるわ。」

「ああ…そうだな…そのとおりだ…」

ゆつくりと赤ん坊を寝かせ、リヴェリアは頭を抱えた。

「私は…間違っているのか…?」

「……」

「きりがないのはわかってている…けど…この子は私が直接助けたんだ！だから…その責任を…果たしたいだけなんだ…」

正直、ロキとしても難しい話であることはわかっているし、この話に正解などない。どれもが正解であり、どれもが正しく道であるのだ。フィン 의견は組織を預かるものとしては妥当な判断である。反対に、リヴェリアの願いも真つ当な人の、女の願いであるのだ。フィンとて鬼ではない。だから、できることならリヴェリアの意見を尊重したい気持ちはあるのだ。

けれど、命というものは、何よりも重いものだ。だからこそ、躊躇してしまう。誰もが、この小さなぬくもりを失くしてしまわないか、その恐怖に怯えてしまうのだ。

「なあ、リヴェリア。もう、ロキ・ファミリアは小さくない。ゼウスんとか、ヘラんとかがいなくなつて、最大派閥といえ、ウチを含めあと2つか3つや。その副団長が、子守に掛かりきりになるんは、組織としては、良くはないはなあ…」

「……っそうか…」

落胆の色を見せるリヴェリアに、しかしロキはいたずらっぽく笑つてみせた。

「けどなあ、それがどうしたんや。ワガママ結構や、それが人つちゅうもんやろ！なあ、リヴェリア…結局は、リヴェリアの心や。」

「ロキ……」

ロキは、諸々の問題と思考を丸投げして、行く末を見守ることにした。

だって、こんなに面白そうなことはないのだから。

ロキは、外界の娯楽に目がないから、この子供とリヴェリアの行く末を見守るのも悪くないと、広角を上げた。

「なんて、最後はリヴェリア次第っちゆうことや。ウチは、リヴェリア

が決めたことに、反対しない。んじゃ、おねんねの邪魔しちゃあかんからな。ここらで失礼するわ。」

珍しく茶化すこともしなかつたロキは、そのままさっさと去っていった。

「私、次第…:か…」

スヤスヤとベットで眠る真つ白赤ん坊を抱き上げて、眠りの妨げにならないように、優しく、優しく抱きしめた。

## 王族妖精奮闘母子手帳く0歳く ③

「……ああ、こんなにも…小さな命が生きているんだな…」

腕の中ですやすや眠る赤子のぷにぷにの手足をニギニギして、ふふと笑う。

今のご時世、外は危険が多い為にそんなに大っぴらに外に出ることはない。情報収集で必要な時以外は、ホームで過ごすことが多い。

大きな庭は、随分と場所が余っている。ここならば遊具の置き場もあるだろう。

「…お前が、もう少し大きくなって…遊べるようになったら…ここで…戦いなんて無縁の世の中で…一緒に遊ぼう…」

ずっと抱えていたリヴェリアの悩みは、もう無い。彼女の中で覚悟が決まった。

「行くんやな、リヴェリア。」

「ああ…行くさ。」

「なら、ちゃんと成果持つてき！」

「無論だ。」

腕の中にいる赤ん坊を抱き締めて、小指を差し出す。それが、この赤ん坊に対する誓いだ。

「待っている…必ず、必ず…戻ってくるよ。」

リヴェリアは、ロキに赤ん坊を預け、万全の装備でダンジョンに挑む。

「私の覚悟を…!」

リヴェリアは、たった1人ダンジョンに挑む。

「邪魔だツツ!!」

らしからぬ叫びと共に轟音を響かせて、リヴェリアはダンジョンを駆ける。

現在、27階層。肩で息をしながら、リヴェリアは乱暴にマジックポーションを飲み干し、そのまま瓶を投げ捨てた。

(数時間でここまで強行軍だが、調子は今までで1番いい…このまま

目指すはあの場所……！)

周囲はリヴェリアの魔法により、未だに業火に包まれている。チリチリと燃え盛る炎が肌を焼く中、リヴェリアの背後には既に丸焦げになった双頭竜、アンフィスバエナがその骸を晒していた。

もう、リヴェリアはあの赤ん坊を引き取り、育てる気である。それは、もう決定事項だ。

これは、リヴェリアなりの証明のため。フィンやガレスは子守りにかかりきりになり、ファミリアの運営を疎かにすることを気にしていた。

命を預かる重さなど、そんなものは承知の上だ。だから、その憂いを吹き飛ばすほどの成果を持って帰り、文句など言わずあの子を引き取る。

「よし、行くか……！」

そのままリヴェリアは全力疾走で駆け抜け、襲い来るモンスターを魔法使いながら、高レベルまで上り詰めた圧倒的なステータスでぶんどり、次々に沈めていく。

無駄なく、効率よく。ルートは完璧に頭に入っている。安全なんてなんのその、危険地帯だろうがなんだろうが、暴力で解決。

目的地に向かって一直線。

そして、37階層。ついにその目的に相見えた。

「…今のレベルは5…ならば、やるべきはジャイアントキリング……」

響く地鳴りに、徐々に割れる地面。そこから出現するモンスターは、ウダイオス。この【ホワイト・パレス白宮殿】の主。

「糧になってもらうぞ……!!」

スキル2つをフル稼働。

そして、ウダイオスが完全に地表に露出した瞬間。リヴェリアは魔法を解き放つ。

「一瞬でカタをつけてやる……！【我が名はアールヴ】!!」

リヴェリアの号令で、業火の剣が猛った。

「【レア・ラーヴァテイン】!!!」

ウダイオスのその巨軀を、業火の大剣が飲み込み、轟音に苦痛の叫

びすらもかき消した。

しかし、その業火を受け半身を失いながら、ウダイオスは漆黒の大剣で業火を斬り裂いた。

「なんだアレは!?!」

予想外のイレギュラー。周囲一帯全てを吹き飛ばすその剣撃は、孤王の名に相応しい一撃であった。

事前に張ってあった障壁諸共リヴェリアを吹き飛ばし、壁に叩きつける。

障壁があつたとはいえ、リヴェリアに少なくないダメージをもたらした。

「ぐっ…!?!なんだ、今のは…!?!今まで見たことがない…!」

圧倒的なまでの絶望。既に破られた障壁を張る時間はない。次にあの斬撃を喰らえば、胴体から切り離されるだろう。

本来ならば、命あつての物種。冒険者としては撤退が正しいのだろう。

だが、リヴェリアは撤退を選ばなかった。

「私にはなあ…帰りを待つあの子がいる。あの子の為に…私は!今!命を懸けてるんだ!」

立ち上がり、再度魔力を迸らせる。

「来い…叩き潰してやるッ!!」

母とは、どの時代も、どんな英雄よりも強いのだ。

「……リミットだ、迎えに行こう。」

その翌日の朝、フィンとガレスは完全武装でダンジョンに向かおうとしていた。それもこれも、リヴェリアが単身でウダイオスを討伐しに行ったとロキから報告があつたから。ロキから待つて欲しいと願われたが、もうそんなことも言つてられない。

フィンは、リヴェリアの行動の理由を想い、しくじつたかなあと頭を掻いた。

「本当に願い出てきたら、ファミリア全体で育てようと思つてたんだ

けどなあ…」

「その後悔はあの頑固エルフを回収してからじゃ。それでも遅くなくろう。それに、もう儂は割とあの小僧を育てる事に賛成しとるからう。」

「…そうだね。取り敢えず早く向かうべきだ。」

そうして外に出ると、門の方がやけに騒がしい。何かと目を凝らせば、フィンはぶつ、と吹き出し、ガレスは大いに笑った。

「——まさか…！…：そうか…：成程。君の覚悟はそれ程か。見誤ったよ。」

「ガハハハハハツ!!愉快!そうか、これは認めざるを得んなあフィン!」

門の奥には、ボロボロのリヴェリアが勇ましく立っていた。その表情は清々しそうであった。

「ロキ!今すぐに恩恵を更新しろ!」

「ホイ来た!」

どこからともなく飛び出したロキが、外の守衛室に入ってステイタスを更新する。

「リヴェリアLv6キタアアアアア!!!」

その守衛室から聞こえた声に、大いに湧いたファミリアのメンツは直様宴の準備に取り掛かる。しかし、そんな団員を躲しながら、リヴェリアはフィンとガレスの元に向かった。

「…：おめでとう、リヴェリア。」

「私は…あの子を育てる。」

「そうか。」

「…：目一杯、愛してやるんだ…」

「それがいいのう。」

「なあ…私は、良い母に、なれるだろうか…?」

不安が滲むその言葉に、フィンとガレスはニツと笑って言い切った。



「なれるさ、リヴェリアなら。君は誇り高いエルフの英雄。そんな君が、良い母親になれないと思うかい？」

「お前の長所は、そのできないこともできると言つてのける傲慢さじゃろう！母親位できると言つてみせんか!!」

2人の激励に、リヴェリアはへにやりと顔を緩めて笑つた。

「…そう、か…そうだ、な……なつて、見せよう…」

そうして、暖かな笑みで倒れるリヴェリアを支えた2人は、待つていたと言わんばかりに声を上げる赤ん坊の傍に、母親をそつと寝かせた。

全員が出ていった後。

よじよじと体を捻つて、覚束無い足取りで母の元まで辿り着いた赤ん坊は、思い切り甘えるように指を握り、また眠りについた。

その2人の寝顔は、血が繋がっていないはずなのに、よく似ていたという。

これが、母と子の前日譚。これが、初まりの1ページ。

## 逆光源氏物語

プロローグ　　〜どうしてこうなった〜

朝、目が覚める。

隣には、四苦八苦しながらも、純粹で、いい子に育ってくれた我が子。嗚呼、こんなにも子を育てることに愛しさを感じるとは…枯れ果てた母性に火が灯ったのか。

私はそんなことを考えながら、隣にいる息子を起こす。

「ほら、朝だぞ？起きるんだ——ベル。」

処女雪のように白い肌と髪に、真ん丸で真っ赤な瞳は、思わず野ウサギを想起させる。

この子が私の息子である、ベル・アールヴ。10歳。

苗字を完全に同じにするには、面倒なしきたりや色々ベルが苦労することになるので、最後のファミリネームだけを取ってつけた。因みに、名前の由来は拾った時に腕に巻かれていた小さな鐘のアクセサリーが由来だ。

ぷにぷにの頬をつつくと、「うむゆ」とちよつと唸る。それが可愛い。親バカ全開な気もするが、誰もいないこの家族の空間には、関係ないのだ。

「…おかー、さん…」

「どうした？」

「…んへへ…」

うん、可愛い。頭をナデナデ、頬をぷにぷに。朝の癒しの時間だ。

思えば…この子がここまで成長するのに、大した苦労はなかった気がする。腹を痛めて産んだ訳では無いが、大切に、本当の我が子のようになんて育ててきた。それのおかげか、夜泣きはあったが、抱き寄せればすぐに泣き止み、大きくなってからもワガママは少なかった。唯一あったのは、初めての遠征での留守番だったか。行く寸前までずっと膝にしがみついていたのを覚えている。

(時が経つのは…子供の成長は、本当に早い…)

今では、遠征に行ったら自分を守ってくれる程に成長し、気付けばLvも抜かされている。

——ん？なにか、おかしい。こんなに小さな時のベルが私を守れるはずがない。あれ？あれあれ？

「——母さん、起きて。」

「むにや……ハッ……！ベルは？小さいベルは？」

「夢、見てたの？早く顔洗っておきなね？」

そう言っつて、夢の何倍も大きなベルが、そこで笑顔を見せていた。

ま、眩しい！朝からなんでこんな眩しいんだ！

眩しいほどの笑顔を見せてくれて、ベルが私のベットに座り、微笑んでいる。

くそっ、この……無駄に顔ばかり良くなって……！

「母さん。」

「な、なんだ？ベル。」

ベルが、ずいっと私に顔を寄せてくる。

あ、ち、近い近い……

「昔の僕だけじゃなくて……今の僕は、見てくれないの？」

「うううっ」

じ、じゃない！その質問は駄目だ！やめてくれ！勘違いしそうになる！なんだこの胸の動悸は!?

い、いや落ち着け……私……そうだ、ベルは今の自分を見てくれているか、不安なだけだ……なんだ、そんなことか……

わかっているくせに、ベルはこうして不安そうな顔をするんだ。まったく……母親である私が、お前を見ていないなんて、あるはずもないのに……

母親らしく、私はベルの頭に手を置いてから、額を合わせるようにして、優しく語り掛ける。

「まさか……ありえない。私はお前を誇りに思っているよ……気づけば、

Lvだって私を抜かして、都市最速とまで呼ばれて…まったく、無茶ばかりで、母は心配だ。」

「あはは…ごめんね、母さん…でも、僕はさ…どうしてもなりたくって…」

「ん？何にだ？」

そう言えば、ベルの目標は知らない。頑なに私には教えてくれなかったから。しかし、ベルの言うことだから、私の恥にならないようにとかそう言う――

「り、リヴェエ、リアに、相応しい男になりたくって…」

「へっ…？」

「……」

や、やめてくれ。どうして黙るんだ…後なんで私の名前を呼んだんだ!…こ、心做しかベルの顔が徐々に赤くなっていく。あつ、これは昔から変わらないんだな。

あつ、今の私、すごく母親っぽい！

「い、いや、その…これは、違くて…!」

ベルの顔が、林檎のように真っ赤になった。

私は、至って冷静に、母親らしく微笑んだ。

「ふふふつ、今でも十分私にとって誇りだよ。」

「そ、そう！か、母さんに相応しい子供になりたくてさ！あはは…」

ああ、どうしてちよつと残念そうな顔をするんだ…

「親孝行な息子だな…本当に…ありがとう、ベル。」

そう言つて微笑むと、ベルはまた顔を赤くした。

「ぼ、僕！先に食堂に行つてるね！待ってるよ母さん！」

「ああ、すぐに行くよ。」

真っ赤になったベルが、そそくさと部屋を出ていく。その後ろ姿を、私は母親らしく余裕を持って見つめ――

——られるわけないだろうがああああ!!!

「なんだアレ！なんだアレ！なんだアレ!? ふさわしい男ってなんだ！あのちよつと残念そうな顔なんだ!？」

もう、女は耐えられなかった。丹精で美しい顔を真っ赤に染めあげ、尖った耳まで真っ赤にさせる。

布団にくるまって、脚をバタバタ。まるで恋する乙女のように、女はベルの顔を思い出す。鼓動の音が、うるさい程に耳に響いた。

「わ、私は…母親なのに…母親なのに…!？」

それも、少しベルのことを考えただけで、鼓動が跳ね上がる。

「ああああ…!これでは…まるでベルに恋しているみたいではないか…!？」

しているのです。

(リヴェ、リアに、相応しい男になりたくって…)

「ムリiiiiiiiiiiii!!もうムリiiiiiiiiii抑えられる自信ないiiiiiiiiii!!」

恋愛耐性・経験ZEROの女の、慟哭が朝から響く。

やんごとなき家系に生まれ、今までは同族からは尊敬の眼差しで見られるばかり。確かに、数多の男から好意を持たれたこともあったし、今もある。しかし、どれもこれも、ベルと比べると酷くどうでもいい存在で。ベルの好意に気づいた日から、自分の気持ちに気づいた日から。こんな考えも持つようになってしまった。

私とベル…別に血は繋がってないから、別に問題ないのでは？

それを意識しだした瞬間から、女は鉄の処女から恋する乙女に早変

わり。

御歳100歳、処女。リヴェリア・リヨス・アールヴは、初めて恋を知った。しかも、育て上げた義理の息子に。

「ロキiiiiiiiiiii!!!」

「うおお…なんや、リヴェリア? まあたベルの事かいな…取り乱しすぎやろ自分…」

いつもの凜々しいママはどこに…と首を振って呆れるのが、赤髪をもつリヴェリアの主神である、ロキ。

「もう無理い! ベルが尊すぎる! 耐えられる自信が無いい…!!」

「耐えなくてええやん…ベルだってリヴェリアのこと好きなんやし…ああもう…エルフってホンマに恋すると面倒やな!!」

「うう…どうしてこうなった…! 私はまだ可愛がっていただけなのに…!」

「そやな」

ロキは、リヴェリアの言葉を聞き流した。

だって、未だにベルと同じベットで寝ていたり、手を繋いで出掛けたり、過度なスキンシップをしているくせに、こんな事に一喜一憂するだなんて、もう面倒なのだ。聞けば、いつもリヴェリアからやっていることだと聞いて、ロキはこの話を聞く度にイラツとしていた。

ついにロキは、トドメを刺す。

「なあ、知つとるか? リヴェリア。極東にある物語でな、こういうのがあんねん。」

「自分を慕う年下の女の子を攫って、自分好みの大人にして自分の恋人にしてまう物語…【光源氏】って言うねんけどな。」

「待て、嫌な予感しかしない…やめてくれ…」

「それでな、最近神連中で流行ってる言葉があつてな…これとは逆の、年下の男の子を、年上の女が理想の男に育てあげるつちゆう意味やねんけどな。【逆光源氏】。リヴェリア、半分事案やで?」

「うるさいっ! 私のせいじゃないもんっ!!」

叫ぶリヴェエリアに、追い打ちをかけるように

「んじや、理想のタイプは？」

「…優しくて、強くて、ごつい男よりは…可愛い方がいいな。愛でたい。」

「うん、ベルやな。」

「はっ、嵌められた!？」

「嵌めとらんわ!いい加減に認めえ!」

ぬおおおと唸るリヴェエリアを他所に、ロキは呆れ果てていた。これが、両片思いと言うやつなのかと。

最初こそはニマニマニヤニヤと嬉しそうに見てはいたが、こうも長い事見せられては、焦れたい。

(あー…面倒やわあ…)

「ロキっ!この事は、くれぐれも外に漏らすなよ!」

「ああ…はいはい。わかつとるよ。」

「絶対だからな!」

そう言つて去つていくリヴェエリアの後ろ姿を見て、哀れそうな視線で見送った。

「リヴェエリア…どうして【逆光源氏】なんちゆう言葉が流行つとるのか…普段のままやったら…気づいてたんやろなあ…恋は盲目…あながち間違いってわけでもあらへんな…」

ロキは、遠い目でリヴェエリアを見送ったのだ。

この物語は、意図せずして逆光源氏計画を成功させてしまった女、リヴェエリア・リコス・アールヴの、苦悶の日々を書き記した物語である。

息子の癖に生意気だ〜リヴェリア様は喰われたい〜

いきなりではあるのだが、約18年…ベルを育てるのに、私はとにかく苦勞…あれ?……してないな。叱ることも…なかつたな。好き嫌いも…特に無いな。これと言って手がかかったこと…無いな。

まあ、そんな感じでふわつと育てたベルなのだが。上に記したようにベルを育てるにあたって特に苦勞することがなかった気がする。

いや、違うだろ。もつとこう…苦勞するものなのだろう?アイナが滅茶苦茶大変だって言ってたのに…個人的な話なんだが、子供つてもつと手がかかるものじゃないのか?アイズなんて手がかかるなんてものじゃなかったぞ?今考えるとあの子おかしくないか?ベルがいくらか矯正したが…戦闘狂すぎないか?仮にも私が育てたんだぞ?いや、事情が事情なのはわかるが…ねえ?七歳の少女がモンスターを轢き殺していくのなかなか衝撃的だったわ。

#### 閑話休題

「…話がそれだが、ベルに我儘とか言われたこと無いんだが。」

「…もしかして、今までの話は僕に話しかけているのかい?」

そうして、目の前の金髪碧眼の見た目は子供、頭脳は大人を地で行く。シヨタジジイことフィン・ディムナ。詳しい説明は省く。皆あれだろ?原作とか、二次創作みてよく知ってるだろう?

まあ、とにかく。この場には二人しかないわけ。既に耄碌していたのだろうかトリヴェリアは可哀想なものを見つめる様に視線を投げた。

「いや、この二人の空間で誰に話しかけていると言うんだ。私が気でもやってしまったと思っていないか?」

「…違うのかい?」

「…喧嘩なら買おう。言い値で。」

おー怖い怖いと両手を上げてヒラヒラさせたフィンは、おどけたように続ける。

「で、君は何が言いたいんだい?」

「ベルに我儘を言って欲しい。」



「もつとバカ親っぽく言ってくれ。」

「あー、息子の可愛い我儘聞きたいな。」

「……」

「いま、面倒臭いとか思っただろう。」

「凄い…君は9つの魔法だけでなく読心術までできるのか…！」

「こいつ…！」

バカにしてくるフィンに、リヴェリアは殴りたい衝動を抑えながら、拳を震わせる。

「…お前も、前からベルは欲が無きすぎると言っていたじゃないか。」

「まあ…それについては同意かな。彼が英雄譚以外の事に興味を持った所を見たことがない。」

ベルという少年は、幼い頃から英雄願望が強かった。

決まってリヴェリアが暇な時を見計らって、英雄譚の読み聞かせをせがみにきた。それが可愛くて字の読み書きの時期を平均よりも遙かに上回って教えたのは、ベルには内緒だ。

「…仕方ない。僕も彼を幼少から知る身…彼の我儘のひとつでも聞いてみたいとは思っていたからね。ちよつと彼と話してこよう。」

「流石我らが団長だ！じゃ、何言っていたか後で聞かせてくれ、頼むぞ。」

そう言つて上機嫌に出ていったリヴェリアに、若干イラツとしながら、フィンはため息混じりに、我らが人類最強の元に向かった。

「ここに居たんだね、ベル。」

「あつ、フィン！僕を探してた？」

中庭を見下ろすテラスで読書に耽っていたベルに声をかける。長身であり、すらつとした見た目から『貴公子』とか言われるベルは、本を読んでいるだけで実に絵になる。

「ああ、ちよつと聞きたいことがあつてね。隣、いいかい？今なら淹れたてのコーヒー付きだ。」

「ふふつ、じゃあ僕からは、今日焼いたスコーンを付けるよ。」

「おつと、これはいい。君のスコーンは絶品だ。」

美味しいと信頼があるフィンのコーヒーと、ベルが焼き上げるスコーンは、振る舞われればその日1日が幸運である。と言われる程に美味しい。と、リヴェリアが言っている。いや、親バカとかではなく、実際に美味しい。

「うん、やっぱり君のスコーンは美味しいね。コーヒーとよく合う。」  
「フィンのコーヒーも相変わらず美味しいよ。それで…なにが聞きたいの?。」

「ああ、実はね…君の我儘が聞いてみたくてね? ああ、これにも理由があつて…君の母親と昔の話をしていたら、ついそんな話になつてね。無欲な君の我儘を是非とも聞いてみたいな。とね?。」

フィンがそう言うと、ベルはキョトンとした顔の後に、ぷふつ、と吹き出した。

「そんなにおかしいことを言つたかい?。」

「いや、うーん…ワガママかあ。」

「やっぱり、無いのかい?。」

「えつと、上手く言えないんだけど…僕は、さ…母さんと本当の家族じゃないでしょ? それなのにこんなに愛してくれて、優しさを注いでくれて…充分満たされてるから、かな。」

頬を染める貴公子を見れば、フィンはやはりと目を瞑った。

こいつら、本気で恋してやがる。

しかしまあ、血の繋がりが無いわけで。同じファミリアだし、相手は『神に昇つた者』とまで言われるベルだ。種族の間での問題はとうの昔にない。エルフに聞けば

「リヴェリア様の伴侶なんてベルさん以外有り得ません!。」  
とか

「リヴェリア様の伴侶となられるからには、頭脳明晰で容姿も申し分なく優れた品性と度量を持ち男らしく家事もこなし記念日を消して忘れない殿方くらい…:…:心当たりがベルですね。」

と、太鼓判を押されるくらいだ。

「君は、本当にリヴェリアが好きだね。」

「うん、好きだよ。愛してる。もちろん、女性として。」

揶揄いの意味で言った言葉が、まさか全肯定で帰ってくると思わなかったフィンは、呆氣に取られる。

「あんなに強くて、優しくて…美しい女性<sup>人</sup>を、僕は知らない。男だったら、恋しちゃうでしょ、普通。」

「——ハハハハッ！君は、偶に思いがけない思い切りの良さがあるよね。」

「こうでもなくちゃ人類最強なんて名乗れないさ。」

おどけて見せた目の前の大英雄に、フィンは姿勢を正して投げかける。

「ベル。君が英雄を目指したその理由は…なんだい？」

フィンの質問に、ベルは澀みなく、少しの間もおかずに答える。

「誰も支えられない、強くあろうとした、たった1人のお姫様の英雄になりたかっただけさ。」

強い瞳のベルに、フィンは英雄の起源を見た。

「それだけ聞ければ、十分だ。」

「おっ！フィン、どうだった？何か言っていたか？」

「いいや？なんにもないとき。」

「むう…フィンでも聞き出せないか…」

「案外、直接聞いてみれば言ってくれるかもしれないよ？」

「そう…だろうか。」

「自信を持ちなよ。君は、彼の母親だろうか？」

「そう…だな…分かった！直接聞いてくる！ありがとう、フィン！」

「ああ、彼によろしく。」

そうして、バタバタと出ていくリヴェリアの後ろ姿を見て、フィンはニヤリと笑った。

「ククツ…後でベルに結果でも聞いて、それを肴に酒でも飲もうかな…」

「すー、はー…私は母親怖くない…よし…ベル？今大丈夫か？」

コンコンつと、ベルとリヴェリアの共同部屋の扉をノックする。家族と言えど、礼儀は大切だ。

『はーい、どーぞー！』

元気な声が聞こえて、中に入る。そこには、ソファーに腰かけたベルが本をパタンと畳み、こちらに微笑みを向けていた。

(…息子ながら引くぐらい良い男に育ったな…いやー…まじやばい。)

どこか推しに会ったオタクのような反応を心の中で零すリヴェリアは、当たり前前のようにベルの隣に腰掛ける。

「どうしたの？母さん。」

「い、いや…その、だな、あの…」

クルクルと指で髪の毛を巻き、普段よりも数段しおらしくなったりヴェリアは、羞恥のあまりどう言おうか焦り散らしていた。

(ヤバイヤバイヤバイ!?!なにいえばいいんだっけ？あれ？私はなんでここに来たんだっけ!?)

隣を見遣れば、「ん？」と爽やかな微笑みと優しさ、そして愛情を孕んだ瞳に見つめられ、顔に熱がぐわつ！と集まる。

(あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ!!強過ぎる!顔面が強すぎる!!--  
あつ、やば…変な気分になつてきた。)

「か、母さん?どうしたの?」

「もつ、もも問題ない!そ、そうっ!我儘だ!ベルの我儘が聞いてみた  
いんだ!」

もう、強行突破しかないと思ったりリヴェリアは、文脈なんぞクソ喰  
らえ。と言わんばかりに、ベルにその言葉を投げかける。

「我儘…?うーん…」

すると、少し考え込む様に唸ったベルは、閃いたように手を叩く。  
「…じゃあさ、今日は少しだけ…わがままでいてもいいかな?」

「あ、ああ!勿論だとも!どんと来い!」

胸を張るリヴェリアがおかしかったようで、ベルはその様子にくす  
くすと笑う。その姿を見て、リヴェリアは微笑んで一瞬だけ目を瞑  
る。しかし、流石人類最強か。

その一瞬で、リヴェリアを押し倒した。

「……へ？」

「…母さん…ううん。リヴェリア…悪い子の僕を、許して欲しい。」

手は頭の上で優しく押さえつけられ、完全に動けない。しかし、本気で抵抗すればリヴェリアなら逃げられる。しかし、当の本人は――

（はへ？え？おし、倒されてる？え？ベルに？あ、顔近づ…いい匂いする…これ、く、喰われる？せ、性的に？）

エルフは貞淑な種族である。特にリヴェリアはそれが顕著である。許した者でなければ肌を許さない種族なのだ。

しかし、誰かが言った。『落してしまえば、後は詰めよれば勝ちだ』と。

まさに、リヴェリアはエルフのお手本の様な堕ち方をした。

荒いベルの息、男らしく、然れどしなやかな筋肉が、服の隙間から覗く。

自分もベルも、興奮していることが分かる。

「べ、ベル…だめ…」

「嫌なら、逃げていいんだよ。」

「あ…そんなこと…私は、ベルの、母で…あつ…べる、やめ…」

「今は…今だけは、リヴェリアでいて欲しい…」

今は、今だけは女リヴェリアでいて欲しいと。ベルは懇願する様にゆっくりと顔を近づける。

（ああ…く、喰われてしまう…ベルに…ああ…！）

数百年の間、誰にも許さず、心を奪われなかったリヴェリアの心は、既にベルにメロメロ。もうぞつこんと言うやつだ。つまりはまあ、喰われるのも満更ではないという。

「リヴェリア…目を、瞑って。」

「…は…はひ…わかりましたあ…」

そうして、目を瞑ると、ゆっくりとベルの顔が近づいてくるのが分

かった

「はっ!?!」

「あ、起きた?おはよう母さん。」

気がつけば、ベルの腕の中で眠っていた。いつもの様に、リヴェリアが抱き枕にしているのではなく、抱かれていたのだ。

「べっ、べ、ベル?!こ、これは…その…どういう…」

「…昨日、母さんが我儘いえー!って言うから、一緒に寝ようって言ったはずんだけど…だめ…だった?」

「ぐにゅ…:だめ、じゃないぞ!いつでもいいぞ!」

全てが夢だとわかって、安堵している自分と、落胆している自分がいることに、嫌悪感を覚える。

(ベルは純粹に母親としての私を求めてくれていたのに…!私は何んという夢を…っ!あああああ!煩惱滅却!まだまだ未熟だ私はア!)  
リヴェリアが悶絶していると、ベルのハグの力が少し強くなる。余計に感じるベルの熱と匂いに、リヴェリアは頭がクラクラするのを抑えられなかった。

「べ、ベル?」

「ねえ、母さん。夢ってね、記憶の整理だったり、経験の追体験でもあってね——自分が将来起こって欲しい事を見せることもあるんだってさ。」

妖しく笑うベルの顔に、ゾクゾクと背筋が震える。

「ずっと、僕の名前呼んで…ダメとか、言ってたけど。どんな夢を見ていたの?」

「あっ、ひっ。ベル…?」

顔に、熱が上る。自分でもわかる。顔が今やばい事になってる。

それでも、ベルは攻めることを辞めない。耳元で、囁くように、逃げられないように、甘く、蕩けるように囁く。

「——ねえ、リヴェリア…僕に教えて欲しいな…?どんな夢を見ていたの?」

「~~~~~つつつ?!?!」

名前を呼ばれて、ものすごいエロいベルに、百何十年と恋愛をしてこなかった、恋愛クソザコナメクジのリヴェリアは、1発KOノックアウト。

「——きゆう…」

「…あれ?母さん?母さん!」

どうすればいいかわからなくなったりヴェリアは、考えるのをやめた。

その後、部屋でロキと酒を飲むリヴェリアが、同じことをずっと呟いていたと、ロキからフィンにリークされた。

「む…息子の癖にい…私の心をこんなに掻き乱すなんて…生意気だあ…!でもお…好きい…」

デレっ、とだらしなく蕩けた顔は、ロキの部屋の机に、写真として残されている。

その事にリヴェリアが気づくのは、また別の話。

「全部夢…なーんて…誰が言ったのかな…?ふふふっ…」

## 〇〇しないと出れない部屋くプロローグく

いつもの朝。

目が覚めて、顔を照らす朝日に目を眩ませながら――

「えっ?」

なんてことはなかった。

間抜けな声を出したのは、恋に恋する乙女（リヴェリア・リヨス・アールヴ。御歳ひゃk

とまあ、朝起きたら真っ白な空間にいて、隣にはベルが寝っ転がっていた。今までの習慣として固い床に息子を寝かせるのがしのびない心が疼き、ベルの頭を抱え、自身の膝に乗せて、よしよしと頭を撫でてやる。

「あつ、寝癖…ふふふ…」

ぽわぽわとした気持ちだが、心地よくて、普段は見せないような微笑みまで出てしまう。

しばらくそうして癒されていると、ベルの瞼がぱっちり開いた。

「おはよう、ベル。」

「……………おはよう、母さん…で、どういう状況?」

「さっぱりだ。」

いっそ清々しい程の物言いに、ベルはだろろうなあ、と零す。

「んー…見たことない部屋。ロキ・ファミリアには無いよね?」

「ああ、こんな真っ白な部屋…しかも、窓すらない部屋、覚えはないな…」

「とりあえず…壁壊してみる?」

『まあ待ちたまえ、ベル君。』

ベルが拳を握ると、軽い声が部屋に響いた。それも、この声はよく聞き慣れている。

「…またヘルメス様ですか。」

「神ヘルメスか…いかにも、だな…」



『ちよつとー？2人ともー？呆れるの早くないかなあ？』

陽気でおちやらかしたような軽い声。ベルをことある毎に歓楽街に連れていこうとして、何度殴ったかわからない。ロキと並ぶ変神。

伝令の神、ヘルメス。

コイツは、いつもベルに問題を持つてくるため、リヴェリアは心底嫌っていた。

「あー、もうそういうのいいんで。用がなきゃこの部屋壊しますね。」  
『だから待ってー!?話を聞いて!?君そんなキャラだったっけ!?』

確かに、いつもは優しい微笑みを浮かべているベルが、明らかにイライラしている。なんでだろうか？

「ベル、どうした？何をそんなに怒っている？」

「だって…母さんが巻き込まれてるから…」

『君本当にリヴェリア嬢が絡むと容赦ないな!?…あの、興味本位で聞くんだけど、当時11歳のLv5で『静寂』をぶっ飛ばしたって伝説本当？』

「また、随分昔の話を…」

「あー、アルフィアか…また懐かしい話を…」

「あの時は色々と僕も荒れたからなあ…倒れた母さん見た時なんて…」

「それを言うなら、怒り狂ってあの女の喉仏食い千切ったのは怖かったです。教育を間違えたのかと思った。」

「魔法使いつて喉潰したら勝ちって言ったの母さんじゃん…それで勝ったんだから。」

「だからって、目も当てられないくらいボコボコにするやつがあるか…いや、敵だったからいいけども…」

『あつ、ホントなんだあ。』

どこか引いたような声の後、ヘルメスは咳払いをひとつ。

『さて、本題に入ろう！』

「めんどくさい気がするから帰っていいですか？」

『だから待って!?き、君たち親子は、オラリオでも有名なおしどりカツPr——もとい、仲良し親子だ!』

「今なんと言おうとした?」

「なんだか聴き逃してはならない言葉を聞いた気がして、リヴェリアが少し頬を染めながら、天を睨む。しかしこの女、ちよつと嬉しいのだ。」

『そこで!俺とロキは思った!君たちの絆の強さは如何程なのか!』

「ロキも関わってるのか:帰ったら覚えておけよ:」

『おいコラヘルメスウ!?何言ってくれとんねん!』

「あつ、そこにいるんだ。」

『ハハハハハ!君だけ逃れようつたつてそうはいかないぜ!?死なば諸共!人類!いや、神を含めてギリシヤに敵は居ないベル君のお仕置きという名の拷問を俺が受ける!君はその最強を育てあげた母親から折檻を受けるがいい!!』

「お仕置される覚悟だけは殊勝なんですねヘルメス様。」

「もうなんでもいいから早くしてくれ。」

ガツクリと疲れを表すリヴェリアを後目に、ヘルメスは吹っ切れたように解説を続けた。

『今から行われるのはカップル——もといカップルの絆の証明ゲーム!』

「カップルではない!?親子だ!」

「:んー。」

『題して!○○しないと出れない部屋アアアア!!!』

異常なテンションで続けるヘルメスは、もはや誰にも止められない。後の恐怖をかなぐり捨てて、今の愉悦に浸りたい。果てしなく邪な感情が見え見えの暴走列車に早変わりだ。

『あつ、言い忘れてたけど、君たちのステータスはロキに言って止めてもらってるから。いつもの力は使えないぜ!』

「うわー、無駄に手が込んで:スキルが発動しないわけだよ:」

「本当に無駄に手が込んでるな。」

脱出の手立てを奪ってまで、ヘルメスとロキは何がしたいのだろうか。2人の絆など、もはや周知のものはずなのに。

『ルールは簡単!これから出されるお題に2人で協力してこなしても

「らう！」

「僕達にメリット感じないんですが？」

『まあ、聞けつてベル君…この中のお題は…ロキが決めた中からランダムに選ばれる。君ならわかるだろう？』

「……………はっ…!?!」

「…ベル？」

そう、ベルは理解してしまった。

ロキは、自他共に認める(?)変態。そのロキが指定したお題が、真つ当なはずが無いのだ。

そう、つまりは、このもどかしい親子以上恋人未満な現状に終止符を打てるのではないか？

正直、リヴェリアを母と呼ぶ事に、若干の疑問を抱き始めたのだ。女として好いている人を、母と呼ぶのは酷く複雑な心境である。

ベルも、お年頃なのだ。

(ごめんなさい母さん…恋は、戦争なんだ！)

そうして、頭をフルで回転させたベルは覚悟を決める。

「…やります！」

「どうしたんだベル!？」

『流石はベル君だ！あつ、それと、この企画が進行してるうちは、お互いに名前で呼び合うことを強制しまーす。名前で呼ばなければゲームも始まりませーん。』

「頑張ろう、リヴェリアー！」

「ひえっ、眩しっ…うっ…と言うか適応早くないか!?だが、ううむ…仕方ない、のか…?…頑張ろう…べ、ベル…」

名前で呼ばれ、思わず頬を染める。それに、笑顔が眩しすぎる。顔面凶器とはこのことを言うのか。顔がひたすらにいい。

それに、名前を言うのが、どうにも恥ずかしい。なんというか、ムズムズする感覚をリヴェリアは感じていた。

『はあー、顔赤くなつとるリヴェリアほんますこ。』

『いやあ、まさか【九魔姫】のこんな顔が見れるなんてなあ…ベル君がいるからこそ…かな?』

「おいそこ！冷静に分析するな！違うから！照れてないからあ!!」

「どうどう、リヴェリア。そう怒らないで。」

「うぐう…だつてあいつらがあ…!」

「ここから出たら一緒に仕置しようね。」

「うん…吊るす…」

『すつごい、甘い雰囲気やのに言つとることくつそ不穩なんやけど。』

腕の中で羞恥心が炸裂して幼児退行したリヴェリアを、これ幸いとよしよし甘やかし、幸せそうに微笑むベル。

（もう、出れなくていいや。」

『ベルくーん、心の声漏れてるぞー?』

『ホンマになんでここ付き合つてないん?主神としても不思議なんやけど。』

この焦れたい関係に、終止符を打つ為に、少年は奮起する。

「ううう…なんで私がこんな目にい…ベルだからいいもののお…うへへ…」

そんな覚悟を、母親代わりの女は、知る由もない。と言うか、現実逃避から未だ帰ってきていない。しかし、心地よい撫ぜる感覚にずっとこのままでもいいかともか思っちゃつてるあたり、やはりこの2人、似た者同士である。

『さあ！早速最初のおだいに行こうかあ！じゃあ、ロキ、くじ引いて。』  
何が来るのかと恐れるリヴェリア。反対にニコニコしているベル。  
そして、運命のくじは、リヴェリアに牙を剥く!

『ほいよー…つと…さて、お題は——【愛してるゲームで10回往復】や!』

「——は?」

最初っからクライマックスだった。

## ○○しないとお出れない部屋 愛してるよゲーム

『さあーやって参りました○○しないとお出れない部屋!!第1のお題は、愛してるよ♥?ゲーム!!!いやあああああ!!!』

「テンション高いし気持ち悪いし第1つてことは第2第3があるつてことじゃないか?!」というか私たち何ヶ月ここに閉じ込められてた?!」  
「むしろ」褒美です。」

「ベル!頼むからお前はまともでいてくれ!」

『ベルたんなりふり構わなすぎちやう?』

そんなこんなで、お題をこなさなきゃ出られなくなった2人は、何とかお題をこなすことに。兎にも角にも、ルールが分からなきゃ進まない、後で死刑1歩手前が確定しているヘルメスがテンションMAXで宣言する。

『さて!まずは愛してるよゲームを説明しよう!』

「しなくていいが、早く終わって欲しいからさっさと説明しろ。」

「おら、ヘルメス様。リヴェリアの照れ顔見たいから早くしろください。」

『まあ、そう焦らなくてくれベル君。なに、ゲームのルールは至って単純!お互いに近距離で見つめ合い、《愛してる》と囁くだけ!して、赤面した方の負け!そうだなあ、3回赤面した方が負けつてことにしようか!』

「……た、単純だが…純粋に、ストレートに羞恥心を煽ってくる…」

「よーし、頑張るぞ〜!」

「さあ!1往復目!はじめ!先行はクジ引きで——ベル君!」

ニヤリと笑ったベルは、リヴェリアとの距離を一気に詰めて、もうくつついてひとつになつてしまふんじゃないかという距離まで迫る。

「ちっ、ちちち、ちちちち、ちちち!」

『あれ、リヴェリア今小鳥に転生した? (笑)』

「(笑) じゃない!待て待て待て!べるっ、ち、ちっかい!」

「でも、こうしなきゃお題クリアにならないですよねヘルメス様?」

『あー、そだねー!』

「滅茶苦茶棒読みじゃないか!？」

そんなこんなで、周りは敵だらけ。というか味方だと思っていたベルまでもが裏切り、この状況を楽しんでいる節がある。ああ、もういやと全てを投げ出したリヴェリアは、ベルをしたから上目遣いで見つけた。

「……優しく、して……？」

「イタダキマス！」

『待て待て待て!!!ベル君正気になって!?!?!ここでおっぱじめるつもりか!?!』

「R—18じゃないから、やらないけど……男として……最後まで責任を果たす!!」

『やるんやな!?!今!?!ここで!!』

「ああ!勝負は、今!?!ここで決める!」

『何が始まんのかこれ。』

抱き寄せたリヴェリアを見つめ、ベルは脳髓にまで響き渡るイケメンボイスを披露する。

「愛してる、リヴェリア。僕の物になってくれ。」

『なんとストレートな愛の言葉!?!さてリヴェリア嬢の反応は!?!』

「———はい♥」

『アウト————!!!仮にも母親がしては行けない顔!?!もはやメスです!?!メスの顔をしています!?!』

欲望が吹き出たリヴェリアは、ゲームということも忘れて、つい返事をしてしまった。

リヴェリア特攻を持つベルにリヴェリアが敵う道理は無いのだ。

「……はっ!?!私は、今なんと言っていた!?!」

「漸く、その気になってくれたんだね……嬉しいよ……」

「待て!?!今のはノーカンド!!ゲームだ!?!これはゲーム!?!たった一言で息子に落とされるとか!?!そんなくそ雑魚じゃないんだ私は!」

『さっきのリプレイする?』

「おいこれ録画してんのか!？」

叫び散らかすリヴェリアを何とか落ち着かせて、次はリヴェリアのターンに移行する。

『さて、次はリヴェリア嬢の番ですね。解説のロキ。どう見る?』

『あくまで母親としての愛を貫こうとするやろな。見ててみ。』

「くっそ、絶対あいつら殺してやる…!」

呑気に実況解説を行う神共に怒りを溜めつつ、リヴェリアは深く深呼吸。

「…なに、そう私は、義理とは言えベルの母親だ。愛の言葉を紡いで何が悪い? そうだ、よく考えたら何も悪いこと無くない? うん! 私悪くないな!」

『おつ、フラグ立った?』

「立ってない!——よし、行くぞお!」

「ん?」

そうして振り返ったリヴェリアは、文字通り息を飲んだ。

(…:…すう——私のベルイケメンすぎんか?)

固まった。文字通り、そのまま固まった。親バカここに極まれり。と言っても、非公式の2つ名が貴公子の時点でお察し。顔がとんでもなくいい。そう、もう一度言おう。

顔が、いい!

以前も記した様に、荒くれ者ばかりのこの冒険者界隈において、甘いマスクに最強の男という属性持ち。週間オラリオ雑誌では抱かれない冒険者ランキングの1位をフィンと争っている。そのランキングを知ったリヴェリアとある女が出版社に殴り込み企画が頓挫しかけたこともあったが、今はどうでもいい。

そんな理想とも言えるベルに、リヴェリアは毎度の事ながら固まる。

『おつ!—これはベルの顔がいい事でダメージをくらったりリヴェリアやないか。』

『あれ、もしかしてSRくらい?』

『いやノーマルやな。割と毎日見るで。』

「母さんのこの顔そういう事だったのか…」

「違う違う! 待て! そういうことではない!」

わーわー! と叫ぶりヴェリアは、なんとか話を遮るため、ベルの顔を驚掴み間近まで迫った。

「そ、そうだ…私は【九魔姫】…Lv8のオラリオ最強の魔道士だ! ベルがLv12だって関係ないっ! わ、わわ、私が母親だから! 私の方が強いっ!」

「リヴェリア、それどんな理屈?」

「お母さんと呼びなさい!!」

『あつ、ダメや。混乱して思考回路めちやくちやになつとるわアレ。』

『いや、あんなに混乱してるリヴェリア嬢を見れるとはなあ。』

「私は、母親だ…子供に愛を注ぐ事だってなんの問題もない…そう、そうだ! お、おお、お母さんに任せなさい…!」

目をグルングルン回して大混乱。もうやけくそが混じつたりヴェリアは、真つ赤な顔のままブツブツと独り言を繰り返しながら、とうとう意を決したのか、ベルを見つめた。

「——ベル、あい、愛してる…」

「リヴェリア…?」

「私は! お前を、腹を痛めて産んだわけじゃない…本当のお前の家族から引き離してしまったのも…私だ…だけど、けど! お前が! お前が、産まれてくれて…わたしは、本当に嬉しいんだ…だから…愛してる…愛してるんだ、お前は…私の息子だから…!」

「——母、さん」

混乱からか、リヴェリアが抱えていた物を全て吐き出したのだろう。大昔に、ベルの血縁から引き離したのはリヴェリアだった。もうそんな事気にもしていないのに、リヴェリアはずうっとそれが痼として残っていたのだろう。

柔く微笑んだベルは、肩で息をするリヴェリアを優しく抱きしめ



た。

「…僕も、拾ってくれた人が貴女で本当によかった。愛してる、僕のもう1人の母さん…」

「ベル…ベル…っ」

そんな親子の1場面を、神ふたりは号泣しながら見ていた。

『なんやあのエモい空間はあああ！もう無理や！ヘルメスう！』

『こんな、こんないきなり泣かせる話あるか!?』「あつ、ここで昔話挟んで完成度を曖昧にしよ」って魂胆が見え見えだけど！』

決してそんな意図はないが、ベルはヘルメスに優しく語りかける。

「ヘルメス様…お願いがあります。」

『わかってるよ…無意味に急がせてしまったようだ。すまなかった、2人とも。』

「神ヘルメス…」

「僕達には、僕達なりの進み方がありますから…だから、見守っていてください。」

『ああ、これからは無粋な真似はしない。君らの物語を…見守らせてもらうとしよう。』

この流れ、もしやこのまま出して貰えるのでは？と希望を抱いたりヴェリアは、漸く抜け出せると安堵の表情で笑った。

「そ、それじゃあ…」

「うん…母さん」

— 次のお題行こっか。 —

「へ？」

さつきまでの空気は霧散し、ベルは満面の笑みでリヴェリアを見ていた。

「な、なんでだ!? 今のはいい話だなー。で終わりだろう!? ここから出

れる流れだったじゃないか!!」

「母さん。僕が発現したアビリティで最高の物って何かわかる?」

「え……か、狩人のSS?」

「そう、正解。だから、僕はね、狙った獲物は逃さないし、ここでリヴェリアを仕留めるって決めたから。」

——逃がさない。」

「ぴいつ!」

『あの目マジやな。バキバキにキマつとるわ。』

『あの空気、黒竜戦を思い出すなあ。』

『人類の存亡かかってた戦いと同等ってマ?』

完全にキマっちゃってるベルは、もはやリヴェリアを逃がさない  
と、優しく、けれど鎖が締め付けるようにリヴェリアを抱きしめた。

「さっきまでのどこに行った!」

「親子として、というのはわかったから……次は男女として、にしよう  
か。」

「嘘だドンドコドーン!!」

「お題も僕が決めようかな——セッ○スしないと出れない部屋  
で。」

「却下————!!!やめろベル!押さえつけるなあ!」

ゲームはまだ始まったばかり、ベルの猛追をリヴェリアは躲せるの  
だろうか?

「いつまで私は、この部屋にいればいいんだあああああああああ  
!」

王族妖精の絶叫が、真っ白なワンルームに響いた。

神のイタズラは、まだまだ続く。